

利尻島鴛泊で発見されたカグヤコウモリの毛色変異個体

佐藤雅彦

〒 097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町 利尻町立博物館

A Long-legged Whiskered Bat, *Myotis frater*, with Reduced Pigmentation, from Oshidomari, Rishiri Island

Masahiko SATO

Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

Abstract. One female long-legged whiskered bat, *Myotis frater*, with reduced pigmentation, was captured by mist net in forest at Oshidomari, northern Rishiri Island, Hokkaido, Japan, on 25 August 2004. The fur color was pale brown, and the skin was so transparent that blood vessels were clearly identified without supplemental lighting. This phenotype might be caused by leucism, because the bat had pigmented eyes. This is the first recorded finding of leucism of this bat species.

筆者は2003年から利尻島内のコウモリの移動について標識調査を継続している。2004年8月25日に一頭の毛色変異を伴うカグヤコウモリのメスを捕獲したので、以下に報告する。なお、報告に先立ち、本稿のご校閲、ならびに貴重なご意見をいただいた原田正史氏（大阪市立大学）、白化個体の文献についてご教示いただいた前田喜四雄氏（奈良市）、澤田 勇氏（奈良市）、英文校閲をいただいた Ronald L. Felzer 氏（Merritt College）に心からお礼申し上げる。

捕獲場所は、利尻島の北部、鴛泊の温泉施設に近い針広混交林内であり、カスミ網により捕獲された（環西道発第 0405140001 号）。これまで利尻島においては5種のコウモリ（ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ウサギコウモリ、コテングコウモリ、キタクビワコウモリ）の記録があるが（前田・佐藤, 1995）、本個体の外側膜は足指の基部につき、下腿長は20.0mm、前腕長39.6mmであることなどからカグヤコウモリと判断した（コウモリの

会, 2005）。捕獲時の体重は8.5gであった。8月下旬は中手骨と指骨の骨化具合で当歳獣の識別が可能な時期である。調査したところ、本個体は当年生まれの個体ではなく、乳首が未発達な非繁殖個体のメス成獣であった。この個体は通常のものと同様の体毛や皮膚の色とは大きく異なり（図1）、全身の体毛は明るい茶褐色となり、腹部ではより白色に近い色を呈した（図1e）。また皮膚はうすい黄土色となり、直下の血管や筋肉が順光でも見えるほど透明性が高かった。計測と写真撮影後、本個体に金属標識（番号 H1016）を装着し、同日放獣した。この個体は通常の個体に比べると体毛や皮膚は明らかに明色を呈するが、アルビノ個体が持つような白色の体毛や赤い眼でないため、毛色変異種にあたるものと考えられた（Talerico, 2008）。いずれにしても、筆者が知る限りカグヤコウモリにおけるこのような毛色変異個体の報告はこれまでなく（澤田, 2006, Uieda, 2000）、非常に稀な例と考えられる。

一般的に野生下における白化個体は外敵に発見さ

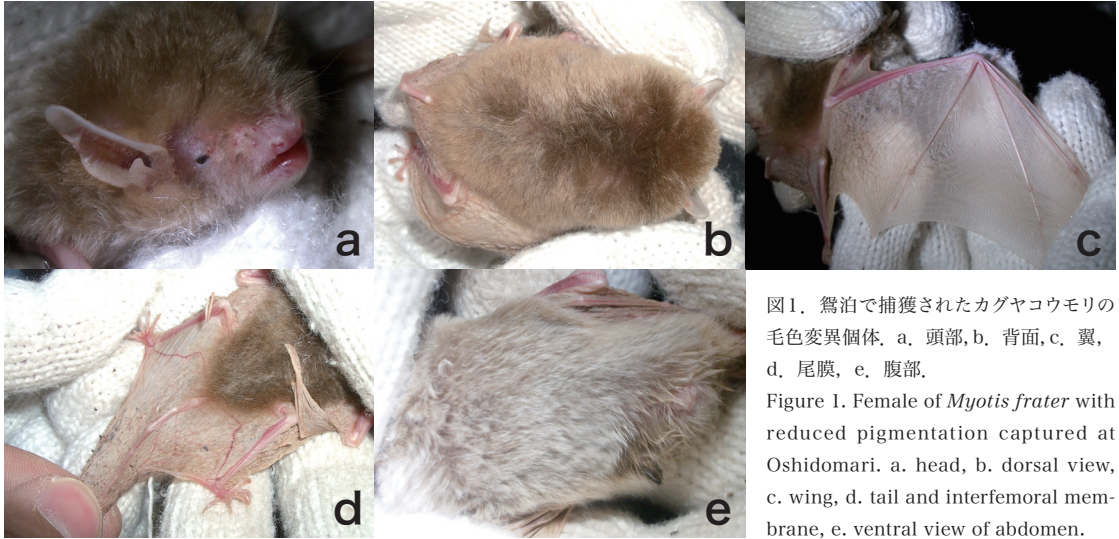


図1. 鴛泊で捕獲されたカグヤコウモリの毛色変異個体。a. 頭部, b. 背面, c. 翼, d. 尾膜, e. 腹部。

Figure 1. Female of *Myotis frater* with reduced pigmentation captured at Oshidomari. a. head, b. dorsal view, c. wing, d. tail and interfemoral membrane, e. ventral view of abdomen.

れやすく、アルビニズムによる個体についてはメラニン色素が欠乏するため、通常個体よりも体内への有害な紫外線透過が多くなるなどの悪影響が及ぶことなどから、生存に不利となる場合が多いと想像される。しかし、主に夜間に活動し、特に洞穴などを日中のねぐらとするコウモリなどでは、視覚を主に用いて捕食を行う外敵から発見される可能性や紫外線の影響も少なく、上述のような悪影響は受けにくいと考えられる (Buchanan, 1985; Uieda, 2000)。

国内におけるコウモリの白化現象をまとめた澤田 (2006) によると、全身白化個体としてユビナガコウモリ、コキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ (Harada *et al.*, 1991)、ヒナコウモリの4種の例が報告されているのみである。原田・箕輪(2004)では、白化個体の発見が少ない事は全身白化個体が目立つことによる捕食率の高さによるものと推測している。また、これらの全身白化個体種はいずれも洞窟や人工物に多数の個体が集まりねぐらとする種であり、樹洞を主に利用するコウモリの全身白化の例はこれまで国内では見つかっていない。その理由としては、観察される個体数が洞穴などを利用するコウモリに比べて著しく少なく、白化個体が発見される確率が低いことが考えられる。

カグヤコウモリの捕食者としてはチゴハヤブサが

知られているが (米川, 1992)、利尻島においては猛禽類の繁殖例が少なく、チゴハヤブサの繁殖も確認されていない。しかし、島内ではハヤブサの繁殖があり、本種は洞穴から飛び出すコウモリを捕食した例もあるが、餌のほとんどが鳥類であるとされ (森岡ほか, 1998)、樹洞棲のコウモリで占められる本島においてはハヤブサがコウモリの主要な捕食者となっているとは考えにくい。また、ヘビなどの爬虫類も利尻島には生息していない。本島のこのような生息環境がカグヤコウモリの毛色変異個体の生存率にどのような影響を与えているのかは不明である。これまで利尻島内で標識が装着された46個体のカグヤコウモリのうち、再捕獲された6個体はすべて同一場所における捕獲であり、その行動範囲はそれほど広いものではないことが想像された (佐藤, 未発表)。毛色変異個体を放獣後、同地域で7回の調査を実施したが、この個体の再捕獲はできていない。今後、同地における毛色変異個体の再捕獲などにより、その生存状況や繁殖状況が確認されることに期待したい。

参考文献

Buchanan, G. D., 1985. Comments on frequency of melanism in *Myotis lucifugus*. *Journal of Mammalogy*, 66: 178.

- Harada, M., I. Sawada & K. Aso, 1991. Albinism in the Japanese large-footed bat *Myotis macrodactylus*. *J. Mamm. Soc. Japan*, 16(1): 37-39.
- 原田正史・箕輪一博, 2004. 柏崎で発見された毛色変異を示すユビナガコウモリ: 67-68. 柏崎市立博物館 (編), コウモリの世界. 柏崎市立博物館. 柏崎.
- コウモリの会 (編), 2005. コウモリ識別ハンドブック. 文一総合出版. 68pp.
- 前田喜四雄・佐藤雅彦, 1995. 利尻島におけるコウモリ類の分布. 利尻研究, (15): 45-48.
- 森岡照明・叶内拓哉・山形則男・川田 隆, 1998. 図鑑日本のワシタカ類. 第2版. 632pp. 文一総合出版. 東京.
- 佐藤雅彦・村山良子・前田喜四雄, 2005. 中頓別町のコウモリ類の分布. 利尻研究, (24): 19-27.
- 澤田 勇, 2006. 日本のコウモリにみられる白化. 長崎県生物学会誌, (61): 27-31.
- Talerico, J. M., T. S. Jung, R. M. R. Barclay & K. S. Melton, 2008. Abberant coloration in a little brown bat (*Myotis lucifugus*) from the Yukon. *Northwestern Naturalist*, 89: 198-200.
- Uieda, W., 2000. A review of complete albinism in bats with five new cases from Brazil. *Acta Chiropterologica*, 2(1): 97-105.
- 米川 洋, 1992. 北海道の集約農業地域におけるチゴハヤブサの食性. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, (14): 63-74.